

■研究・実践の課題（テーマ）

健常高齢者の長期縦断疫学研究(Nagoya Longitudinal Study for Healty Elderly:NLS-HE)

■主任研究者 岡田希和子

■共同研究者 葛谷雅文、松下英二、長谷川千紗、西山ゆい、佐竹昭介

■研究・実践の目的、方法、結果、考察や提案等の概要

【目的】

高齢者における低栄養状態は、身体機能の低下、疾患の発症や悪化のリスクとなるため、サルコペニアおよびフレイル予防の重要な介入項目といえる。また、低栄養状態と口腔機能の低下（オーラル・フレイル（サルコペニア））は密接に関係していると考えられる。本研究は、健常高齢者における口腔機能の低下と食物摂取状況の関係を調査し、低栄養状態のリスクの早期発見の因子を見出すことを目的とした。

【方法】

名古屋市高年大学に通う同意が得られ口腔機能調査が可能であった 425 名（男性 175 名、女性 250 名、平均年齢：男性 69.1±0.3 歳、女性 68.3±0.3 歳）を調査対象とした。調査項目は、年齢、性別、身長、体重、BMI、四肢骨格筋量、握力、歩行速度、食物摂取頻度調査、MNA および口腔機能検査（天然歯数、咀嚼力、咬合力）である。咀嚼力、咬合力についてそれぞれ男女別に四分位し、下位 25%群を本研究では口腔機能の低下群と位置づけ、上位 25%群と比較検討した。

【結果】

咀嚼力分類において、男性では口腔機能の低下群の「嗜好飲料」の摂取量が有意に多く、「種実類」の摂取量が有意に少なかった。女性では口腔機能の低下群の「嗜好飲料」の摂取量が有意に多かった。咬合力分類において、男性では口腔機能の低下群の「麺・ゆで麺」の摂取量が有意に多く、女性では口腔機能の低下群の「砂糖類」の摂取量が有意に多かった。

【結論】

本研究における口腔機能の低下群の身体組成、身体機能、栄養状態は決して低い値ではなかったが、口腔機能の低下群では食物摂取状況に一定の傾向が見られ、「嗜好飲料」「麺・ゆで麺」「砂糖類」といったエネルギー源の内訳が増加していた。このような食物摂取状況の偏りは将来の低栄養状態のリスクとなると考えられる。口腔機能の低下がみられるオーラル・フレイル（サルコペニア）状態は、食物摂取状況の偏りを引き起こすため、食習慣に注目した介入は低栄養の予防および早期発見につながると考えられる。